

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：31307

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730588

研究課題名(和文)曖昧さ耐性は抑うつへの抵抗要因となりうるか？

研究課題名(英文) Does ambiguity tolerance play a role as buffer for depression?

研究代表者

友野 隆成 (TOMONO, Takanari)

宮城学院女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：80469080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、積極的に曖昧さに耐えられることが抑うつへの抵抗要因となりうるかを検討することである。まず、項目内容を全て曖昧さに耐えられることを表すものにした新しい曖昧さ耐性尺度を開発し、信頼性および妥当性の検討を行った。その結果、一定程度の信頼性および妥当性が示された。そして、その尺度を用いて、曖昧さ耐性と抑うつとの関連性について検討した。その結果、曖昧さ耐性は一部抑うつへの抵抗要因となりうることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The present study examined whether tolerating ambiguity positively could be a buffer factor for depression. First, we developed the new Ambiguity Tolerance Scale (ATS) in which all items were positively worded, and examined its reliability and validity. Second, we used the ATS to examine the relationship between ambiguity tolerance and depression. Results showed that ATS had relatively good reliability and validity, and that ambiguity tolerance could partially buffer against depression.

研究分野：パーソナリティ心理学

キーワード：曖昧さ耐性 素因ストレスモデル 抑うつ 尺度構成

1. 研究開始当初の背景

(1)曖昧さ耐性と

曖昧さ耐性は、“曖昧な事態を好ましいものとして知覚(解釈)する傾向”であり(Budner, 1962), 個人が直面した曖昧さに耐えられるか否かを表すパーソナリティ特性である。Frenkel-Brunswik (1949) によって、権威主義者の曖昧さ耐性の低さが観察されたことに端を発し、この概念に関する多くの研究が様々な観点から行われてきた。そこでは、曖昧さ耐性は“曖昧さに耐えられる-耐えられない”という次元で捉えられてきた。そのことを踏まえて、測定尺度も幾つか開発されてきた(例えば、Budner, 1962; Norton, 1975; 友野・橋本, 2005a など)。しかし、ほとんどの測定項目が“曖昧さに耐えられない”ことを表す内容のものであり、“曖昧さに耐えられる”ことを積極的に捉えることができる尺度は皆無であった。その後、西村(2007)により「曖昧さへの態度尺度」が作成され、「曖昧さの享受」「曖昧さの受容」の2つの下位尺度が、この問題点の解消にそれぞれ一石を投じているが、より多次元的な「態度」という構成概念を想定して項目が作成されているため、“曖昧さに耐えられる”というニュアンスとは異にしている。

(2)曖昧さ耐性の時制について

Grenier, Barette, & Ladouceur (2005) は、今現在は直面していないが将来生じるであろう不確実性に耐えられる特性を不確実性耐性、まさに今現在直面している曖昧さに耐えられる特性を曖昧さ耐性として、それぞれ概念化している。しかし、Grenierら自身も指摘しているように、この解釈は2つの変数の概念的な相違点を示す実証データが未提示で、臨床場面における観察によるものに過ぎなかった。さきに例示した先行研究(Budner, 1962; Norton, 1975; 友野・橋本, 2005a) や西村(2007)においても、時間軸を現在と未来に分けて項目が作成されていない。そこで、曖昧さ耐性を、現在直面しているものと、未来に生じるであろうものと分けて測定できる尺度の開発が必要であると考えられる。

(3)曖昧さ耐性と抑うつに関連性について

健常大学生を対象とした実証研究(Andersen & Schwartz, 1992), および躁うつ病患者の臨床的観察(Kraus, 1977)において、それぞれ曖昧さ耐性の低さが抑うつと関連していることが示唆されている。本邦における、素因ストレスモデルを用いて曖昧さ耐性の低さと抑うつとの関連性を検討した研究(友野・橋本, 2005b)においても、対人関係に関する曖昧さ耐性の低さが抑うつの増大を予測することが示されている。これらのことを踏まえ逆の観点から仮定すると、曖昧さ耐性の高さは抑うつを抑制することが想定される。

2. 研究の目的

本研究では、まず、異なる観点から作成された複数の既存の尺度(友野・橋本, 2005a; 西村, 2007)と抑うつの関連性について予備的な検討を行うことを第一の目的とする(研究1・2)。次に、その結果および「1. 研究開始当初の背景」で論じたことを踏まえ、従来にはなかった時間軸を予め設定し、且つ曖昧さに耐えられることを積極的に捉えることができる新しい曖昧さ耐性尺度を開発し、その信頼性・妥当性を多角的に検討することを第二の目的とする(研究3・4)。そして、曖昧さ耐性が抑うつを含む精神的不健康の抵抗要因となり得るかどうかが、第二の目的に従い作成された新しい尺度を用いて検討することを第三の目的とする(研究5・6)。

3. 研究の方法

(1)研究1・2

研究1では、女子大学生を対象に調査を実施し、回答に不備の無かった137名を分析対象とした。平均年齢は18.92歳($SD=0.85$ 歳)であった。調査対象者に対し、授業時間中に質問紙を配布、書面および口頭で調査の趣旨を説明し、同意した調査協力者に対してのみその場で回答を求め、回収した。質問紙に含まれた尺度は、改訂版対人場面における曖昧さへの非寛容尺度(友野・橋本, 2005a), 曖昧さへの態度尺度(西村, 2007), 自己評価式抑うつ性尺度日本語版(福田・小林, 1973)であった。分析は、研究1で用いた尺度も加えて実施された。

一方研究2では、研究1から約1ヶ月後に同一調査対象者に調査を実施し、2回の調査に回答を不備なく行った67名を分析対象とした。平均年齢は18.88歳($SD=0.80$ 歳)であった。こちらも研究1同様の手続きで調査を実施した。質問紙に含まれた尺度は、対人ストレス尺度(橋本, 2005)および自己評価式抑うつ性尺度日本語版(福田・小林, 1973)であった。

(2)研究3・4

研究3では、複数の大学に所属する男女大学生を対象に調査を実施し、回答に不備の無かった205名を分析対象とした。平均年齢は19.95歳($SD=1.13$ 歳)であった。調査対象者に対し、授業時間中に質問紙を配布、書面および口頭で調査の趣旨を説明し、同意した調査協力者に対してのみその場で回答を求め、回収した。質問紙に含まれた尺度は、新版曖昧さ耐性尺度(Tomono, 2013)およびState-Trait Anxiety Inventory (STAI)日本語版(清水・今栄, 1981)のうち、特性不安に関する20項目であった。

一方研究4では、女子大学生を対象に調査を実施し、回答に不備の無かった127名を分析対象とした。平均年齢は19.17歳($SD=0.93$ 歳)であった。調査対象者に対し、授業時間中に質問紙を配布、書面および口頭で調査の趣旨を説明し、同意した調査協力者に対してのみその場で回答を求め、回収した。質問紙

に含まれた尺度は、新版曖昧さ耐性尺度 (Tomono, 2013), 不確実さ不耐性尺度 (竹林・笹川・坂野・杉浦, 2012), 二分法的思考尺度 (Oshio, 2009), 改訂版対人場面における曖昧さへの非寛容尺度 (友野・橋本, 2005a), 曖昧さへの態度尺度 (西村, 2007) であった。なお、研究 4 の一部では、(株)クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースに登録されたモニターのうち、4 年制大学あるいは短期大学に通う男子大学生を対象に web 調査を実施し、回答に不備の無かった 50 名も加えて分析対象とした。平均年齢は 21.72 歳 ($SD=1.42$ 歳) であった。web 画面上で回答を求めた尺度は、上記 5 尺度と同一であった。

(3)研究 5・6

研究 5 では、(株)クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースに登録されたモニターのうち、4 年制大学あるいは短期大学に通う男女大学生を対象に web 調査を実施し、回答に不備の無かった 500 名を分析対象とした。平均年齢は 20.94 歳 ($SD=1.43$ 歳) であった。web 画面上で回答を求めた尺度は、新版曖昧さ耐性尺度 (Tomono, 2013), 楽観・悲観性尺度 (外山, 2013), 精神的回復力尺度 (小塩・中谷・金子・長峰, 2002), SRS-18 (鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野, 1997) であった。

一方研究 6 では、(株)クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースに登録されたモニターのうち、4 年制大学あるいは短期大学に通う男女大学生を対象に web 調査を 2 回実施し、全ての調査に有効回答をした 392 名 (男性 186 名, 女性 206 名) を分析対象とした。平均年齢は 21.01 歳 ($SD=1.34$ 歳) であった。web 画面上で回答を求めた尺度は、新版曖昧さ耐性尺度 (Tomono, 2013), 大学生用日常生活ストレス尺度 (嶋, 1992), Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) 日本語版 (島・鹿野・北村・浅井, 1985) および State-Trait Anxiety Inventory (STAI) 日本語版 (清水・今栄, 1981) のうち、状態不安に関する 20 項目であった。

4. 研究成果

(1)研究 1

研究 1 では、対人場面における曖昧さへの非寛容と曖昧さへの態度が抑うつに与える影響を検討するために、抑うつを基準変数、対人場面における曖昧さへの非寛容と曖昧さへの態度それぞれを説明変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果、対人場面における曖昧さへの非寛容は曖昧さへの態度が回帰方程式に投入された後も抑うつに有意な正の影響を与えていたこと、曖昧さへの態度は対人場面における曖昧さへの非寛容を回帰方程式に投入する、しないにかかわらず、抑うつには有意な影響を与えていなかったことが示され、曖昧さへの態度に比べて

曖昧さへの非寛容の方が抑うつの脆弱要因としてより妥当であることが示された。

(2)研究 2

研究 2 では、対人場面における曖昧さへの非寛容と曖昧さへの態度をそれぞれ素因とする素因ストレスモデルを検討するために、時点 2 の抑うつを基準変数とした、階層的重回帰分析を行った。時点 1 の抑うつ (共変量)、対人場面における曖昧さへの非寛容若しくは曖昧さへの態度と対人ストレス (主効果)、交互作用項の順に回帰方程式に投入した。その結果、曖昧さへの態度の下位側面である、曖昧さへのネガティブな態度と対人摩擦の組み合わせの場合のみ、有意な交互作用効果がみられた。下位検定の結果、曖昧さに対する否定的態度が高い者は、対人ストレスの多寡にかかわらず抑うつが増大する一方、曖昧さに対する否定的態度が低い者は、対人ストレスの増大に伴い抑うつが増大するが、対人ストレスが減少すると抑うつも減少することが示され、素因ストレスモデルで仮定されている交互作用効果とは異なる交互作用が示された。

(3)研究 3

研究 3 では、新しい曖昧さ耐性尺度の作成および信頼性・妥当性の多角的な検討のために、以下の分析を行った。

Budner(1962), Norton(1975), McLain(2009), Herman, Stevens, Bird, Mendenhall, & Oddou(2010)などの先行研究を参照し、現在と将来という時制、また項目内容が全て曖昧さに耐えられることをそれぞれ表している予備尺度 24 項目を作成した。最尤法プロマックス回転による探索的因子分析の結果、解釈可能な 2 因子が抽出され、それぞれ「曖昧さを統制する能力」と「曖昧さを楽しむ能力」と命名した。また、 α 係数を算出した結果、十分な内的整合性が示された。さらに、対応のない t 検定による性差の検討を行ったが、性別によって有意な得点差は示されなかった。そして、特性不安との相関係数を算出した結果、有意な負の相関が示された。以上のことから、本研究で作成した新しい曖昧さ耐性尺度には部分的に信頼性・妥当性があることが示されたが、当初想定していた時間軸が反映された因子構造を有していなかったことも示され、更なる検討の必要性が示された。

予め将来に関する曖昧さ耐性を測定することを仮定した項目の合計得点、および現在に関する曖昧さ耐性を測定することを仮定した項目の合計得点をそれぞれ算出し、どちらがより特性不安に影響を与えるか、共分散構造分析によるパス解析を用いて男女別に分析した。その結果、男性は現在に関する曖昧さ耐性のみが有意に特性不安に負の影響を与えていたのに対し、女性は将来に関する曖昧さ耐性のみが有意に特性不安に負の影響を与えていた。これらのことから、曖昧さ耐性の時間軸設定にはある程度の意義が

あるものと推察されたが、その意義を確固たるものとするために、曖昧さ耐性尺度の更なる妥当性向上の必要性が示された。

曖昧さを統制する能力と曖昧さを楽しむ能力のどちらがより特性不安に影響を与えるか、共分散構造分析によるパス解析を用いて男女別に分析した。その結果、男性は曖昧さを統制する能力のみが有意に特性不安に負の影響を与えていたのに対し、女性は曖昧さを楽しむ能力のみが有意に特性不安に負の影響を与えていた。これらのことから、曖昧さ耐性とその他不適応的な側面を表している構成概念との関連性を検討する際には、性差を考慮する必要性が示された。

(4)研究 4

研究 4 では、研究 3 において検討されなかった、新しい曖昧さ耐性尺度の更なる妥当性の検討のために、以下の分析を行った。

曖昧さを統制する能力および曖昧さを楽しむ能力と、曖昧さ耐性と類似した構成概念である不確かさ不耐性、二分法的思考、対人場面における曖昧さへの非寛容、曖昧さへの態度との間の相関係数を算出した。その結果、いずれの組み合わせにおいても弱い～中程度の有意な負の相関（曖昧さに対するポジティブな態度のみ、有意な正の相関）が示された。これらのことから、新しい曖昧さ耐性尺度の更なる妥当性が示された。

曖昧さ耐性と類似した構成概念である上記 4 種類の特性が曖昧さを統制する能力および曖昧さを楽しむ能力に与える影響を検討するために、曖昧さを統制する能力および曖昧さを楽しむ能力をそれぞれ基準変数、上記 4 種類の特性それぞれを説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、曖昧さへの態度の下位側面である、曖昧さへのネガティブな態度が有意な負の影響、曖昧さへのポジティブな態度が有意な正の影響を、曖昧さを統制する能力および曖昧さを楽しむ能力それぞれに与えていることが示された。その一方で、不確かさ不耐性、二分法的思考および対人場面における曖昧さへの非寛容は有意な影響を与えていなかった。これらのことから、Kenny & Ginsberg (1958)で指摘されているような、構成概念間の複雑な差異が示され、更なる詳細な検討の必要性が示された。

曖昧さ耐性と上記 4 種類の特性との関連性に性差が認められるかどうか検討するために、男女別に相関係数を算出し、得られた相関係数の有意性検定を行った。その結果、男性は曖昧さ耐性と曖昧さへのポジティブな態度との間のみ有意な正の相関が示された一方、女性は全ての組み合わせにおいて有意な正の相関が示された。相関係数の有意性検定の結果、二分法的思考および曖昧さへのポジティブな態度と曖昧さ耐性との間の相関係数にそれぞれ有意差が認められ、いずれも男性より女性の方が相関係数の値が高いことが示された。これらのことから、曖昧さ耐性と類似した構成概念との関連性に

いて検討する際には、性差の考慮が必要であることが示された。

(5)研究 5

研究 5 では、新しく作成された曖昧さ耐性尺度によって測定された曖昧さ耐性と、同様にポジティブな特性とみなされている楽観性および精神的回復力との関連性、および抑うつへの影響について検討するために、以下の分析を行った。

曖昧さ耐性、楽観性、および精神的回復力が精神的不健康に与える影響を検討するために、精神的不健康を基準変数、曖昧さ耐性、楽観性、および精神的回復力それぞれを説明変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果、楽観性および精神的回復力は曖昧さ耐性が回帰方程式に投入された後も精神的不健康に有意な負の影響を与えていたこと、曖昧さ耐性は楽観性および精神的回復力を回帰方程式に投入しない場合は精神的不健康に有意な負の影響を与えていたにもかかわらず、投入後には与えていた影響が有意ではなくなったことが示され、曖昧さ耐性に比べて楽観性および精神的回復力の方が精神的不健康の緩衝要因としてより妥当であることが示された。

曖昧さ耐性と楽観性および精神的回復力との関連性に性差が認められるかどうか検討するために、男女別に相関係数を算出し、得られた相関係数の有意性検定を行った。その結果、男女とも曖昧さ耐性と楽観性および精神的回復力との間に有意な正の相関が示された。相関係数の有意性検定の結果、曖昧さ耐性と精神的回復力の下位概念である感情調整との間にのみ男女で相関係数の大きさに有意差が認められ、男性よりも女性の方が相関係数の値が高いことが示された。これらのことから、曖昧さ耐性とポジティブな特性とみなされている構成概念との関連性について検討する際にも、性差の考慮が必要であることが示された。

(6)研究 6

研究 6 では、曖昧さ耐性を緩衝因、大学生生活におけるストレスをストレス因とする素因ストレスモデルを検討するために、時点 2 の抑うつを基準変数とした、階層的重回帰分析を行った。時点 1 の抑うつ（共変量）、曖昧さ耐性と大学生活におけるストレス（主効果）、交互作用項の順に回帰方程式に投入した。その結果、曖昧さを統制する能力と物理・身体的ストレスの組み合わせの場合のみ、有意な傾向である交互作用効果がみられた。下位検定の結果、曖昧さを統制する能力が低い男性は、物理・身体的ストレスを多く経験すると抑うつが増大していた一方で、曖昧さを統制する能力が高い男性は、物理・身体的ストレスを多く経験すると寧ろ抑うつが減少する傾向があることが示され、曖昧さを統制する能力が抑うつの緩衝要因となる可能性が示された。なお、女性においては有意な交互作用は認められ

なかった。

(7) まとめと今後の展望

本研究では、研究1から6を通して、曖昧さ耐性が精神的不健康の緩衝要因となりうる可能性が示された。その一方で、複雑な性差の存在および類似した構成概念との関連性が一様でないことが併せて示された。これらは曖昧さ耐性と精神的不健康、とりわけ抑うつとの間の関連性を明らかにする際の阻害要因となっている可能性があるため、今後はより精緻に検討することが必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

友野隆成・鹿内美冴 (2012). 曖昧さに対するパーソナリティ特性と抑うつの関連性 宮城学院女子大学研究論文集, 115, 55-65. http://www.mgu.ac.jp/main/library/publication/kenkyuronbun/no115/p115_05tomono.pdf 査読有.

[学会発表](計10件)

Tomono, T. (2015). The relationship between ambiguity tolerance, optimism, resilience, and mental health. ICPS2015(International Convention of Psychological Science), Amsterdam, Netherlands. 2015年3月14日.

友野隆成 (2014). 曖昧さ耐性と楽観性および精神的回復力の関連性 日本パーソナリティ心理学会第23回大会発表論文集, 136. 2014年10月5日.

Tomono, T. (2014a). A critical analysis of the inter-relationships among ambiguity tolerance, and other similar constructs. ECP17(17th European Conference on Personality), Lausanne, Swiss. 2014年7月16日.

Tomono, T. (2014b). The relationship between ambiguity tolerance and trait anxiety. ICAP2014(International Congress of Applied Psychology), Paris, France. 2014年7月11日.

友野隆成・渡邊伸行・鈴木敦命・山田寛 (2013). 表情認知特性とあいまいさ耐性の関係 日本顔学会誌, **13**, 214. 2013年11月9日.

友野隆成 (2013a). 新版曖昧さ耐性尺度の妥当性の検討 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 296. 2013年11月2日.

友野隆成 (2013b). 曖昧さ耐性の時間軸設定の意義に関する検討 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集, 165. 2013年10月12日.

Tomono, T. (2013). A pilot study on developing a new ambiguity tolerance scale. ISSID 2013 (International Society for the

Study of Individual Differences), Barcelona, Spain. 2013年7月24日.

友野隆成・鹿内美冴 (2013). 曖昧さに対するパーソナリティ特性と抑うつの関連性 (2) -素因ストレスモデルによる検討- 東北心理学研究, 63, 18. 2013年5月11日.

友野隆成・鹿内美冴 (2012). 曖昧さに対するパーソナリティ特性と抑うつの関連性 東北心理学研究, 62, 63. 2012年7月15日.

[図書](計2件)

友野隆成 (2014). 特性論的などらえ方 岡市廣成・鈴木直人(監修) 心理学概論(第2版) ナカニシヤ出版 pp.228-232. (主な著者:岡市廣成・鈴木直人他約70名, 順番:46番目)

友野隆成 (2013). 質問紙法 日本パーソナリティ心理学会(企画) パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 pp.682-688. (主な著者:二宮克美・浮谷秀一他約110名, 順番:103番目)

6. 研究組織

(1)研究代表者

友野隆成 (TOMONO, Takanari)
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号:80469080